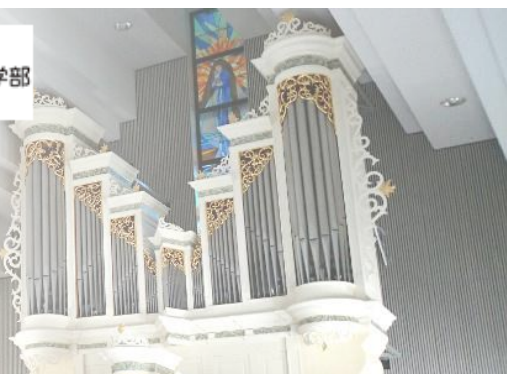


2020年5月14日



『開学記念日に思う』

宗教主事 高木総平

聖書

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。

ヨハネによる福音書 3：16

5月14日は、本学、中部学院大学の開学記念日であり、創立者片桐龍子先生の誕生日でもあります。このような日に改めて本学が立つキリスト教主義で大切なことは何か考えてみたいと思います。人間に取りまして根源的な問いは、この私に存在する価値があるのかという問いであります。日本人は周り比べて判断すると言われていました。またこの産業社会では、バリバリ仕事ができたり、お金を一杯儲ける人が価値があるんだと思われがちです。

今回のコロナウィルスの感染では、日本人のあり方や価値観が大きく問われています。もちろん仕事で成果をあげるとか、学生さんでいうと学習やスポーツで成果を出すことは必要ですし、大切なことです。でもその成果への評価で、人間としての価値は、できない人も変わらないということです。バリバリ仕事ができる人の方が人間として価値があるとすれば、病気や障害で働けない人、寝たきりの人は価値がないということになってきます。元気な皆さんだってやがてはそうなる可能性もあるのです。

では聖書、キリスト教の人間観はどうでしょうか。それは、人間は存在しているだけで価値があるのだ、一人一人がそのまま大切にされているのだということです。今日の聖書、この世、私たちを丸ごと、ダメな部分や嫌な部分を持っている私たちを丸ごと受け入れてくださっているということを言っています。

キリスト教学校はそこから出発しています。創立記念日にはそのことを考え自覚するときなのです。この学院は戦前戦後を通じて困難な時代がありました。戦前はキリスト教主義の学校ではありませんでしたが、今から思うとずっと神様に見守られ支えられてきたのだと強く思います。皆さんもその中にいるということです。「神を畏れることは知識のはじめである」その神を敬愛し（礼拝）その神に聞いて生きるということです。自分たちの力だけでは生きていないという謙虚な姿勢です。それは神がキリストにあって人間を愛してくださったように、私たちも他者を愛するということです。片桐龍子先生も当時の困難にある女性の自立や成長を目指し学校を運営されていましたが、戦後孝先生によってキリスト教主義になったということはよりそのことが明確になったということです。私たちはそのような大きな

御手の中で学校生活を送っているのだということ、全国のキリスト主義学校（小学校～大学院）で学んでいる34万人以上とともに。卒業後もそうですが、苦しいことつらいときにも支えられているのだということを改めて知っていただきたいと思います。進学や就職を考えてくでしようが、その時にどんな人生を送るのか、その神様から見てどうなのだろうか。そんな視点を持ち続けていただきたいと思います。

掲載元：[中部学院大学・中部学院大学短期大学部_チャペルアワー](#)